

逝去された名誉会員等への追悼文

渡辺巖一先生を偲ぶ



1916年 8月16日生
 1940年 慶応義塾大学医学部卒業
 慶応義塾大学医学部助手
 (衛生学)
 1949年 慶応義塾大学医学部講師
 1951年 慶応義塾大学医学部助教授
 新潟医科大学助教授

1954年 新潟大学医学部教授
 1958年 ハーバード大学公衆衛生学部卒業
 1960年 ペンシルベニア大学客員講師
 1967年 新潟大学図書館長・併任
 1977年 新潟大学医学部長・併任
 1982年 新潟大学教授退官・名誉教授
 新潟県労働衛生医学協会名誉会長
 1987年 新潟県健康開発財団会長

渡辺巖一先生は平成23年11月10日、96歳の長寿を全うされご逝去されました。在りし日の先生を偲び、ここに謹んで哀悼の意を表します。

先生は、大正5年8月16日東京のご出身で、慶応義塾幼稚舎、慶応義塾普通部から慶応義塾大学医学部に進まれ、昭和15年に同大学を卒業されました。卒業後直ちに母校の衛生学教室の助手になられ、9月には短期現役海軍軍医中尉として横須賀海軍砲術学校軍医科に赴きました。その後南太平洋を中心に歴戦され、昭和20年5月には海軍軍医少佐、昭和21年7月に復員され予備役被仰付となりました。戦後母校の衛生学教室に復職後、昭和26年5月に助教授となられ、同年9月に新潟大学新潟医科大学助教授として赴任。そして昭和29年に新潟大学医学部教授に就任されました。

教授就任後の研究テーマは、季節の移り変わりなどの環境変化のヒト内分泌系に及ぼす影響でした。各種ホルモンの逐月的変化を調べ、環境変化に伴うヒトの恒常性維持機構を解明しました。その後、化学物質や薬剤などの環境要因が遺伝子、染色体、胎児形態形成に及ぼす影響に関する研究を展開しました。先天異常の原因究明のための基礎的研究から、

先天異常のモニタリングシステムの開発などの実践的研究まで多岐にわたっております。当時はヒトの染色体数が確定し、同時に優れた染色体分析技術が開発された時代でした。先生は、いち早くこの分析技術を自身の研究に取り入れ、染色体異常による胎内淘汰のメカニズムを分析するなど、独創的な研究を数多く行いました。

渡辺先生は昭和32～33年にハーバード大学大学院 School of Public Health で公衆衛生学を学ばれました。そのため、先生は「ハーバードがんちゃん」の愛称で学生に親しまれておりました。学生に新しい医学を学ぶことの大切さを教え、彼らに大きな影響を与えたと聞き及んでおります。私が医学生の時はずでに退官され名誉教授となっておられましたが、幸運なことに一度だけ予防医学概論の講義を拝聴させていただく機会がありました。始まるとすぐに Winslow の有名な一節「Public health is the science and art of preventing disease, prolonging life and promoting physical and mental health and efficiency through organized community efforts ...」を威厳を持って板書されました。また、ヒポクラテスの言葉「Ars longa, vita brevis, occasio praeceps, experimentum periculosum, iudicium difficile」もご教授下さったことを記憶しております。その一方で、私たち学生が机に肘をついて聴講する態度を戒め一喝されました。90分の講義時間中、終始張り詰めたものを感じました。私の中の渡辺先生は、礼を重んじ学問を学ぶ姿勢について非常に厳しい方です。

このような厳格な先生ではありますが、素顔の渡辺先生は、「ハーバードがんちゃん（渡辺巖一著、新潟日報事業社1982年）」という著書から窺い知ることができます。ハーバード大学留学時代の生活、世界各国の医科大学や名所旧跡を訪問した時のこと、ウィスキーのコレクションが趣味であったことなど、様々な人との交流やエピソードがユーモアを交えて綴られています。先生の深い教養と人間愛を感じずにはられません。改めて先生のご功績をたたえ、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

新潟大学教授 中村和利